

ソード・ワールドRPG

サイランド・サガ4

Siland Saga

ダイジェスト・リプレイ

『天空の城塞の廃都の竜』

ACRAP・編
シナリオ作 海保
リプレイ著 海保

目次

目次	2
まえがき	3
(おまけ) ロツとキト <後編>	4
キャラクター紹介	7
冒険の舞台	9
本編	10
第 1 章 帰ってきた二人	10
第 2 章 恐怖！カニ男！	12
第 3 章 な、なんだってー！！	16
第 4 章 炸裂！ライトニングクロス！	20
第 5 章 ウェイク、暗闇に死す！？	30
第 6 章 強引なる竜への転生	36
第 7 章 やべ、強すぎた(マスターの声)	39
第 8 章 いいからとっととついて来なさいよ！というオチ	42
あとがき	44

まえがき

サイランド・サガ第4部「天空の城塞の廃都の竜」です。

これでサイランド・サガはひとまず終了とさせていただきます。読んでいただければわかりますが、今一つスッキリしない終わり方です。まあ、ソード・ワールドは長く続けられるし、全4部にしようという事は初めに決めていたので、敢えてこういう終わり方にしました。続きはウェイクの中の人は何とかしてくれるでしょう、ちゃんとハイドンの中の人にシナリオ案を見せた上で進めればシナリオは問題なく、後マスタリングは経験で何とかするしかないんだから頑張ってやんなさい。

か、勘違いしないでよね！私、D&Dのマスターをやりたいだけであって、貴方にマスターとして成長して欲しいわけじゃないんだから！（ツンデレ）

ちなみにタイトルですが、名前の通りです。今回はドラゴン(レッサーだけど)を出してみました。(しかし、強いな。PCどうにもできないやん。LOTR編と同様、マスターの人焦っちゃったよ。)と言うことでかの有名な『ドラゴンランス戦記』のタイトル¹をごちゃごちゃくっつけてみたという、V2アサルトバスターガンダム²並に節操のない名前です。各章のタイトルといい、サイランド・サガは名前に恵まれていないような気がするけど、いつか一気に直そう。

更に今回は前回のおまけを続けます。ホントは第3部作成の時点でほぼ完成していたんだけど、公開する事に一抹の不安があったので、第3部は前編だけにして第4部に後半を繋ぎ、こっちでまとめる事にしました。これを通常、劇場版エヴァンゲリオン現象と言います。

ということで、ロツとキトの前回の続きから。デキいまいちなぁ…じっくり頑張る。

¹ 富士見書房が出版したAD&Dのプレイを基にした小説。前6作で『廃都の黒竜』『城塞の赤竜』『樹海の緑竜』『城壁の青竜』『～の銀竜』『天空の金竜』となっている。うぉお！5作目のタイトルなんだっけ！？(あと2,4作目もすっごい怪しい)

² 機動戦士Vガンダムから。VガンダムのバージョンアップでV2ガンダム。V2ガンダムには近距離防御力の高いアサルトパーツと、遠距離狙撃用のバスターパーツを装備することができ、両方装備して結果V2アサルトバスターガンダム。うわー、まんまだよ。と思ったけどV2ガンダムの場合その節操のなさ素直さが逆に好き。必殺技は光の翼

(おまけ) ロツソとキト < 後編 >

「野郎！邪魔をするんじゃない！」

(くっ！速い！こいつは化け物か！…化け物だが。)

激昂したギジャの一撃は急所こそ外したもののロツソの左腕を切り裂き、鮮血が吹き出した。しかし、左腕に気をとられてしまっただけでは次の攻撃はかわせない。ロツソは左腕の焼けるような痛みをこらえながらギジャを凝視し続けた。

「キト、魔法だ。ザクとは、もとい、昔とは違うんだろ？」

「しかしあいつは速いぞ。そんな隙がどこにある？」

「それは私が何とかしよう。頼むぞ。」

と言うとロツソは背中中のスピアを取り出し、ギジャに向かって駆け出す。ギジャはニヤリと笑うと、ロツソの腹をえぐり、内臓をかき出すべく、爪を伸ばした。しかし、その刹那！

「燃え上がれ、赤い彗星！キャノンボール！」

ロツソの掛け声と共にかけていたアミュレットが燃え上がり、ロツソの下半身は炎に包まれ、神速のスピードでギジャの傍らを駆け抜けた。ロツソがいた所には炎がくすぶり、本能的にギジャは飛びすさった。

「所詮動物か。残念だが、いくら虎人でも耐火機能はない！」

「な、なんだ、手前え…こ、こりゃ？」

「攻撃が単調になってしまうので使いたくなかったが、仕方ない。あと、熱い…」

ロツソが謎の男から入手したキャノンボールアミュレットには、持ち主の下半身を炎と化し、高速飛行を可能にする力を持つ。なぜこのように強力な魔法の品物がロツソの手にあるのかは定かではないが、ロツソはこれを使う度に昔読んだマンガのヒーローを思い出す。

ロツソの下半身が再び燃え上がる。ロツソはそのままギジャの周囲を旋回し始めた。ギジャは周囲を取り巻く炎に怯え、動きを止めた。そしてキトはこの絶好の隙に乗じるべく、呪文を唱えた。

「輝け！貫け！勝利を掴め！俺の魔法の矢！『エネルギーボルト』お！³」

『エネルギーボルト』そのものは初級の呪文であるが、術者の魔力と気迫を注ぎ込む事によってその威力は限界を超えて強化される。特大の魔法の矢がキトの掌から放たれる、そしてそれはギジャの顔面、牙を狙って放たれる。

「こんな呪文！ - 吼える！引き裂け！風穴を開けてやれ！俺の魔法の矢！『エネルギーボルト』！」

ギジャは意志の力と魔力によって魔法の矢に対抗するべく、両手を魔法の矢に向けて差し出し、同様にありったけの力で『エネルギーボルト』の呪文を唱える。

二人の魔法の矢は空中で衝突し、互いが矢にこめた魔力の勝負となる。

「くうううっ！」

「ぐおおおっ！」

二人は魔法の矢に魔力(と気迫)を込め続けた、少しでも勢いの劣る方は、必要以上に気迫のこもった魔法の矢に貫かれ、命を失う事になる。しかし、奥義書を持つギジャの方が魔力で勝り、少

³ サイランドサガでは、呪文の文句は全てこのように熱い言葉である。意見・批判は一切合財却下する！

しづつキトの魔法の矢を押し返し始める。

「ぬううう……」

「……いいや、お前はもうダメだっ！」

「何を言ってやがる！？もう少しでお前の貧弱な体を引き裂いてやるぜ！」

「俺の魔力は俺だけの力じゃない！」

「な、何っ？」

キトの魔法の矢がいきなり力を増し、ギジャの魔法の矢を一気に押し返す。キトの顔には、魔力を秘めた呪紋が浮かんでいる。

「……っ！何だそりゃあ？まさかそれは……使ったなあ！奥義『精英孔』を！」

「そうだ。これで、俺は自身の魔力だけではなく、この場に満ちる精霊力も、魔力として使う事が出来る！」

「しかし、奥義書のねえお前にそれが使えるはずが……っ！」

「いまわの際に師匠が教えてくれた、たった一つの奥義だ！」

キトの体全体、そして魔法の矢が強く光り輝き、ギジャの放った魔法の矢をギジャの体もろとも貫いた。

「ぐおお……っ！あ、兄より優れた弟など存在しねええええっ！！」

迸るエネルギーに貫かれ、断末魔と共にギジャは跳ね飛ばされた。

「キト、やったな。」

「ありがとう、ロツソ。」

「能力の差が決定的な戦力の差ではないということだな。」

「……？」

ギジャが倒れている、魔力を使い果たしただけではなく、キトが放った魔法の矢に貫かれ、ゆがんだ命はその終末を迎えようとしていた。

「ギジャ……」

「キ、キト……やられたよ……」

「……？」

ギジャが倒れている、魔力を使い果たしただけではなく、キトが放った魔法の矢に貫かれ、弟弟子を憎み、歪んでしまった人生はその終末を迎えようとしていた。

「ギジャ……」

「キ、キト……やられたよ……」

「しゃべらない方がいい。今手当てを - 」

「無駄だ……俺はもう助からねえ……つまんねえ、人生の幕引きだぜ。」

「そんな……」

「まあいいや……どうでもよくなっちゃったよ。結局俺は何がしたかったんだらうな……キト、」

「なんだい？……ギジャ……兄さん。」

「まだ兄さんと……呼んでくれるのか。俺の……牙を持っていきな……奥義書としての力はまだ残っているはずだ……」

「……わかった」

「それと、もう一つ。俺たちヘルハザードの……狙いは……タマサイ城の地下だ……急ぎな、時間がねえぞ……。」

Sword World - Siland Saga

「わかった。ありがとう。」

「最期の最期に……兄らしい事ができたな……キト……あばよ。」

そして、ギジャは事切れた。

ロツとキトは古城を後にした。二人は一言も発しない。しかし、キトの左手にはギジャから託された牙が強く握り締められていた。

二人は決意を新たに、仲間の元への帰途につくのであった。

了

キャラクター紹介

・ハイドン(人間、ファイター&レンジャー、)



人間なのだが、サイコロの目による異様な器用・敏捷・知力の低さにより外見中身ともにドワーフとしか思えない。ドワーフに見えてドワーフにあらず！その正体は人間！でもドワーフと言われると怒る。

豪斧「カチ割り丸」を携えて敵を片っ端からカチ割る。その姿まさに重戦車。終盤、貴重にして唯一のダメージソースだった男

・メルララ(エルフ、レンジャー&シャーマン&バード、)



外伝より参加した。ということになっている。トコロザが滅亡してしまい、メルララも放浪の旅に出ることになる。まあバードだし、どうってことはないだろうけどさ。

レンジャーと言う事で射手。なので、これはこれでダメージソースになるはずだったが、当たってもダメージが出ない。クリティカル値が低くなるので、「もうやめてくれ！」と言う予定だったのに。

・キト=バミアン(エルフ、ヒーラー&シャーマン&ソーサラー&セージ、)



名前をそれぞれ反対に読むと、性格おのずと知るべし。最高の木偶(デク)を作る事に命をかけている。が、マスターの力不足もありその設定を中々活かさなくて困ってる。いわゆる「設定をもてあます」という状態になりつつある。能力値がエリートで特に敏捷度は人間では最高の 24 になる。ちなみに続けて読むとヒー！シャーマンソーセージ。

ガットゥーゾと組んでのライトニングクロスは一見の価値あり。

・ガットゥーゾ⁴(ハーフエルフ、ソーサラー&ファイター、)

NOW
PRINTING

サイランド・サガ初登場のM枝氏のキャラクター。第3部から登場。以前のLOTRではゴルプラス役を演じていた。相変わらずの存在感を醸し出している。今回では魔法戦士らしいのでそれなりに活躍できるようできないような感じである。

キトと組んでのライトニングクロストは一見の価値あり。

⁴ 元ネタ。ジェンナーロ・イヴァン・ガットゥーゾ。セリエA、ACミラン所属のイタリア代表のサッカー選手。ポジションはMF。ハードワーカーの代表格である。2006年W杯でのイタリア優勝は彼の力があってこそだろう。女性ファンが多いイタリア代表の中でダントツの男性ファン数を誇る (Wikipedia)

・ウェイク(人間、プリースト&ファイター、)



当初マスターであったI氏がプレイヤーとして参加。チャ・ザのプリーストとして第2部でジャンドルフに代わって登場。チャ・ザのプリーストらしくない、あんまり。というかそもそもロールプレイしているかも怪しい。口癖は「だぜえ。」だが、あまりに無理矢理すぎて涙を誘う、だぜえ。

興奮すると他のプレイヤーの言葉を奪うという悪癖があり、リプレイを書いていて時々困る。お前じゃなくて他の人に喋って欲しいんだよ！

・ロツソ(ハーフエルフ、シャーマン&シーフ、)



人間の年に直して19歳だが、記憶喪失で2年前以前の記憶が無い。トレジャーハンターとして生計を立てている。シーフ&シャーマンのハーフエルフの熱血漢。赤く(ロツソ=イタリア語で「赤」)て早い。

クワトロ・バジーナ⁵を目指していたが、もう少し中の人が頑張ればよかった。これじゃあ良くてアポリー⁶。

(画像はイメージです)

・シリス(人間、ファイター&プリースト、) - NPC



第4部から登場のNPC。ハイドン達の窮地を救い、そのまま合流してトコロザを脱出する。この第3部では謎の神官戦士として(もっぱら回復に)活躍した。今回で正体は判明する。ただ一つこれだけは言える。こいつはツンデレだ！

(画像は知的財産権とマスターの人格の保護のためモザイクをかけさせていただきました。)

⁵ 機動戦士Zガンダムより。クワトロ・バジーナ=シャア・アズナブル、カミーユのよき先輩として、また自身も優秀なMSパイロットとして活躍。赤とか金色とか。ちなみに百式のコンセプトは「百年使えるMS」だが、F91の時代に百式は使われていないのでやっぱダメだった。

⁶ アポリーとロベルト。Zガンダム時代のシャア(クワトロ)の部下。確か、どっちかは最終回までに死ぬ

冒険の舞台

この物語の舞台はアレラスト大陸ではなく、フォーセリア西方のサイランドという大陸である。



冒険者達はリンド村の遺跡から謎のプレートを発掘した。その後、クッキ市にてこのプレートの調査を行っていたが、調査結果は芳しくなく、結局何なのかはわからないままであった。(第1部)

そんな折、ロツソがプレートを持って失踪、一行はアウラ川を下り、ハンノー市近郊の遺跡まで追跡する。調査隊は既に遺跡の調査をしていたが、謎の敵によって皆殺害されていた。数々の障害(シオマネキー族とか小鳥なガーゴイルとか)を乗り越え、ついに遺跡の最深部に辿り着く一行。そこには古代魔法時代に作られた遺伝子操作装置があり、敵であるジナス、コノハがロツソを捕らえ、一行を待ち受けていた。ハイドンの豪斧「カチ割り丸」が吼え、ジナスを撃破すると遺跡は崩壊を始め、後にはクレーターしか残らなかった。(第2部)

クレーターの謎を問われる前にと一行はトコロザ市に逃れる。ここでエルフの射手メルララと出会い、共にジェスレン少年を救うため、「石巨人の迷宮」に潜入する。最後にはフェニックスの力でジェスレンの父親を蘇生させ、冒険は終了した。(外伝)

そのままトコロザ市に滞在し、大富豪キンカイの歓待を受けていた一行だが、一夜にしてトコロザ市はゾンビの溢れる死者の街に変貌する。謎の神官戦士シリスと合流し、ジェスレンの父親など多くの人々を犠牲にしながら、水道局の地下で首謀者ヘルハザード幹部「蚊のデラツィ」と対決する。デラツィには勝利したものの、トコロザは地盤の歪みにより地中へと崩落していくのであった。(第3部)

そして、必死で逃れたトコロザ郊外から最後の冒険の幕が開く……

本編

第1章 帰ってきた二人

開始からなんだが、早々に録音に失敗し、再度。

マスター「サイランド・サガ最終章と言う事で…始めます。」

キト「ええ～、最終回!？」

ハイドン「聞いてないよぉ～」

マスター「また探さなくちゃいけないじゃないかぁ…(棒読み)(笑)で、君たちはトコロザ市郊外でほうけている状態で、キトとロツゾが一冒険終えて帰ってきた。」

ガットゥーゾ「どんな冒険をしてきたんだ?キト。」

マスター「まあ、そこらへんはキトから。」

おまけ((おまけ)ロツゾとキト<後編>)参照

キトはロツゾと共にトコロザ郊外の古城で「虎のギジャ」と対決し、からくも勝利を収めている。虎のギジャからの情報によるとヘルハザードの目的は肉体改造による不老不死⁷であり、既にヘルハザードの軍勢が西ネイル王城タマサイ城に向かっているという…

ハイドン「タマサイ城の地下には何があるんだ?」

キト「さあ、何かあるとしか…」

ウェイク「奴らの狙いは何だ?」

メルララ「何のために侵攻してるの?」

マスター「などと、君らがダベっていると、シリスが - 」

ハイドン「ツンデレだ」

ウェイク「ツンデレだ」

シリス「さっさとタマサイ城へ向かうわよ!何をグズグズしてるの?」

マスター「と、進もうとしている」

ハイドン「何でだよー?」

キト「初対面なのに…」

マスター「ロツゾがまあまあとか言いながら、全員が行ける様に苦労している」

ガットゥーゾ「目的がないぜえ?」

ロツゾ「トコロザをこんな風にしてしまったのはあいつらなんだが?」

ハイドン「俺、前回寝ていたから許さない度がわからないんだよな(笑)」

マスター「お気に入りのメイド3人がみんなゾンビにされたんだぜ」

ハイドン「嘘!？」

ガットゥーゾ「ゾンビにされたっつうかこいつ投げてたんだぜ(笑)群れの中に置き去りにしたような(笑)」

ハイドン「じゃあ何だよ。自己嫌悪に陥ってるんじゃない、俺は。あの子供も死んだんだっけ?」

⁷ キトと被っているようだが、キトの目的は木偶を作る事そのものであり、ヘルハザードとは少しも被っていない。

子供(ジェスレン)は一行と共に無事生還している。前回最後にウェイクが覚えた『キュアディジェーズ⁹』によって、無事ゾンビ化を免れた事にする。今回もゾンビ状態で続くのは嫌だしな。と。

更に、ロツとキトはファイター、シャーマン、ソーサラー、セージの集団を引き連れている。シリス率いるガーディアンズのメンバーであり、合計で12人程になる。(4人で1個小隊)(ハイドン「こいつらを兵隊として使っていいって事？」マスター「…もちろん」ハイドン「おっしゃ！(笑)」)

こうして、一行は(強引なシリスに率いられ)タマサイ城へ向かう事になる。

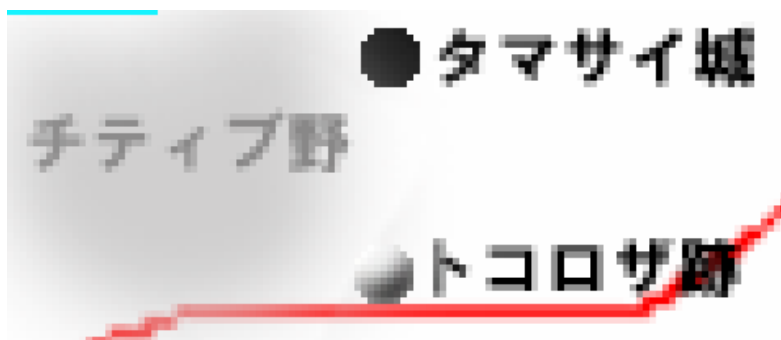


図 1 タマサイ城までの道程

マスター「今回の道程はこのようになっている。トコロザからタマサイ城までは比較的近い」
ウェイク「チティブ？ 秩父？」
ガットウーゾ「俺昔奥チティブ行ったことあるんだよね。遠かった…(笑)セイブイケブクロ街道をずっと行ったんだよ。(笑)」
マスター「さてと、結局馬はないので徒歩で向かう事になるんだが…大体4日の行程だと予測される」
ウェイク「長いな⁹」
マスター「基本的には荒地に行くことになる」
メルララ「屋敷に住んでいればこんな荒地を歩くことはないと思っていたのに…」
ハイドン「あれ？ 高貴な生まれだっけ？」
メルララ「そう。高貴な生まれになったんだよ。なぜか」
ガットウーゾ「なぜか俺従者になってんだもん(笑)」
マスター「リプレイ書きながら思ったけど、逆でも良かったんだよな…ガットウーゾが主人でも」
ガットウーゾ「もう遅えーよ(笑)」
ウェイク「最終回だしな。」
マスター「で、ロツは - 」
ロツ「俺は(NPCだから)先に行って偵察していよう。」
マスター「と、(君たちと別れて)先行する。」

⁹ 名前の通り、病気を回復させる魔法。前回のシナリオにおけるゾンビ状態は病気によるものという位置づけであったため、変則的にこの魔法で回復する事にする。ちなみに、どういう仕組みかわからないけど、この魔法って末期ガン患者にはどういう効果を及ぼすんだろう？

⁹ というか、サイランドが広いんだろうな。徒歩で20人で荒地だという事情を考慮した。

ガットウーゾ「ロツッ！お前のことはもう忘れない！！(笑)」
ロツッ「大丈夫、戻ってくるから。前回いきなり信用されなかったしな」
ハイドン「しょうがねえじゃん、いきなりいなくなってるんだもん。」
ウェイク「いきなり物もってトズラするし」
ハイドン「宿代も払わずに(笑)¹⁰」

そのようにして、一行は荒地を進み続けた。(食料などは小隊が持参していたため問題は無い)。

ウェイク「いちいち申告するのが面倒なので言うておくが、毎日朝に『ラック』をかけておくんで¹¹」
ガットウーゾ「お前の『ラック』のおかげで馬の糞を踏まずにすんでるんだな」
ハイドン「使ってんじゃん(笑)」

こうしてタマサイ城へとシリス率いる一行が出発した。

第2章 恐怖！カ二男！

このようにして、旅をしていると…

マスター「さて、このようにして、谷になっているところを歩き続けていると…<危険感知>¹²！」
ガットウーゾ「谷ってとこがよくない…8」
キト「8」
ウェイク「9」
ハイドン「6」
キト「いやぁ…平和だなあ(笑)」

しかし、メルララはレンジャー(野伏)であるために、一人16で危険を察知する。

マスター「(メルララに)谷の上の方に集団の影が見えた。おい、メルララが何か言ってるぞ」
ガットウーゾ「主人、何を言ってるかぁ！？(笑)」
マスター「いきなり弓鳴りの音がして、30本くらい矢が飛んできました。あ、(ガットウーゾに)刺さった(笑)」
ガットウーゾ「3個小隊全滅しちゃうよ！見せてくれるわ！俺たちの二指真空把！¹³」

¹⁰ 第2部『鷲と杉の木』。ちなみに、ACRAPのサイランド・サガのページがgoogleで「ツンデレ遺跡」のヒット先になって軽くびびった。

¹¹ ラックとは幸運の呪文。術者に対し、単純な幸運をさずけてくれる。「単純」とは自分の力で何とかなる程度の幸運である。例えば、命中した敵の攻撃を外れた事にしたりする事。だから、彼女じゃない女の子と六本木のクラブでキスしてるところを見られたくない人に見られた時に効力は発揮できず、大変な事になってしまうだけ。閑話休題)話を元に戻すと、この効力は一日に1回となっている。なので、商売の神チャ・ザの僧侶(『ラック』の呪文はチャ・ザの僧侶だけに許された呪文である)であるウェイクはこの呪文を毎朝に唱えると無駄がない。ただし、一日一回であるがため、使ってしまうと、翌日になるまでは神様の加護は得られず、夜遊びした事を後悔する事になってしまう。みんな気をつけような！(何を?)

¹² 野外において、このような敵の襲撃や落石などをあらかじめ予知する能力。野外活動のエキスパートである野伏(レンジャー)や盗賊(シーフ。今回ではロツッ)が持つ能力。あくまでも野外における察知なので屋内である六本木のクラブ - しつこい！

¹³ 二指真空把。北斗神拳が奥義。飛んできた矢を二本の指で受け、放った相手にそのまま返す技。かっこつけているが、ガットウーゾはもちろん、誰も北斗神拳の使い手ではないため、宣言するだけ無駄な行動である。

ウェイク「マトリックス避け！¹⁴」

マスター「かっこつけてねえで、一人5本。避ける。」

ハイドン「俺背低いから5本のところ4本で(笑)」

ガットゥーゾ「嘘つけ！¹⁵」

この結果ガットゥーゾは1本、ウェイクは4本、ハイドンは4本、メルララは4本、キトは5本(回避能力がないため)命中した。しかし、鎧の効果でウェイク以外はたいしたダメージにはならなかった。

マスター「君たち、矢はくらいながら鎧で防いでいると…右手の丘から弓矢を構えた何者かが30人ほどいて、一人の男が - 」

???「ここでお前たちを行かすわけにはいかないだぎゃ！」

マスター「と、谷を駆け下りて襲ってきます。」

キト「センスデク！¹⁶(笑)」

マスター「鈍重だが、かなり硬い感じだね。(笑)」

かくして、謎の集団との戦いは始まる。ハイドン達はその男および5人と戦闘を開始する。ただし、メルララは不意打ちに気がついていたために行動できる。メルララは『ストーンブラスト』¹⁷を唱える。謎のリーダーに向かって石の雨を降らせるが、抵抗され、致命の一撃は与えられない。

マスター「で、駆け下りてくる最中…そのバルダー…そのリーダーは変身する。」

一行はセージ(賢者)能力によって鑑定を行うがわからない。

マスター「ヒントだけ言うね。1.海にいます 2.ハサミを持っています 3.殻を持っています」

ガットゥーゾ「う～ん、わからんなぁ(笑)」

マスター「4.食べるとおいしいです(笑)」

キト「あいつ直進してきたけど、突然横に歩き出すかもしれない！(笑)」

バルダー「この蟹の力でお前たちを倒してやるだぎゃ！」

メルララ「サイランドは海がないからな。」



¹⁴ 飛んできた拳銃の弾に対し、背筋を反らして避ける、映画「マトリックス」で有名になった避け方。かっこつけているが、ウェイクはもちろん、一行の誰も、ネオでもキアヌ・リーブスでもないために無駄な(略)



¹⁵ ハイドンは良く似ているがドワーフではない。

¹⁶ キトだけが持つ能力。人に対し、いい木偶(デク)になるかを識別する。

¹⁷ シャーマン(巫女)の唱える精霊魔法の一つ。大地の精霊の力を借り、敵に対して石の雨を降らせる。すごい余談だが、この魔法を聞くといつでも(マンガにもなった)『封神演義』の竜髭虎の『発手群石』を思い出す

ウェイク「俺たちわからないよ。」
マスター「さてさて、残りの5人だが、君たちも何度か相手したことある…シオマネキ君¹⁸。」
メルララ「あぁ～。」
マスター「- なんだけど、明らかに強そうになっている」
キト「改良されたんだな。」
マスター「そういうこと。」
ハイドン「いかにも仮面ライダー好きのマスターが考えそうな設定だな」
マスター「そういうこと言うなよ…(笑)」
キト「『恐怖！カニ男』とかね！(笑)」

使った。

<第1ラウンド>

まずは、キトが『スリープクラウド』を唱えて眠りの雲を発生させて、戦闘員の二人を眠らせた。(ガットウーゾ「ようし！俺たちも寝るぞーーッ！(笑)」)さらに、ガットウーゾは『ファイアウェポン』を唱え、ウェイクの武器に炎を宿らせ、破壊力を高める。そして、メルララはバルダー(蟹)に対し『ホールド』を唱えるが、これも対抗に成功した。動きを止めるはずだが、止まらなかった。

これら呪文による支援の後、ウェイクは戦闘員の一人に攻撃するが、はずしてしまう。論外の攻撃であった。

そして、敵集団の反撃。蟹の動きが遅いため、先行した3人の戦闘員がハイドンとウェイクに攻撃する。これらの攻撃でウェイクが4点のダメージを受け、更に毒によって、生命点に6点の大ダメージを負う。

(喋らないが一応いる)シリスはこのウェイクに対し『キュアウーンズ』を唱え、ウェイクの生命力を9点回復させる。

一方でハイドンはバルダーと交戦する。同じ敏捷度であったため、真っ向勝負となる

ハイドン「甲羅をカチ割ってやる！19点のダメージ！」
マスター「デカいな…」
ハイドン「腕の一本にピピピピと割れ目が入って、肉が取り出せるようになった？」
マスター「それ通し(笑)」

しかし、バルダーも黙っていない。2本のハサミで反撃する。一方のハサミが命中し、ハイドンは挟まれてしまい、身動きが取れなくなってしまった。

<第2ラウンド>

キトはウェイクとハイドンに『プロテクション』の呪文を唱え、受けるダメージを抑える。更にこれ

¹⁸ 敵の軍勢の戦闘員。右手だけが強化されている兵士である。ちなみに、話の度に改良され、強化されている。これまで、名称としては、ときて今回でFinalになっている。どこのオープンソースソフトウェアだ？というツッコミはなしで。

は『ギジャの牙』によって通常の消費と同じになる。¹⁹

メルララ「よくそんな相手に勝てたな」
ウェイク「やつは使いこなせなかったんだろう」
キト「頭が悪かったんだ。」
ハイドン「そんなものを持ってたのに殴ってたんだ(笑)」

メルララは矢に持ち替えて放ち、蟹(バルダー)にダメージを与える。

続いて、ガットゥーゾは『クイックネス(フィジカル・エンチャント)²⁰』をウェイクに対して唱え、敏捷度を高める。しかし、敏捷度ではなく器用度をあげた方が良かったのか、攻撃ははずれてしまう。

NPCであるシリスはハイドンに攻撃している戦闘員に攻撃し、ひきつける。

続いて戦闘員達の反撃、ウェイクはガットゥーゾの支援も空しくダメージを受けてしまう。ハイドンは回避には失敗しているものの、相変わらず硬く、ダメージを通さない。

ハイドンとバルダーだが、ハイドンはバルダーの鉄に捉われているため、振りほどけず、更にもう一本の鉄が迫るが…

マスター「じゃあ、もう一本の鉄もね、捉えられた！」
ハイドン「ロールしろよ！失敗するかもしれないだろ。俺も6ゾロ出たら避けるからな。」
マスター「(こっちが6ゾロ出せば同じ事だからな)…いいよ。ロールして。」
ハイドン「(コロコロ)…やった6ゾロ。避けた！(笑)」
マスター「わかった、わかった。避けたことにしてやろう」
バルダー「往生際が悪いだぎゃ！」

< 第3ラウンド >

キトはエネルギーボルトを蟹と戦闘員に放つ。が、仕留め切れない。続いてメルララが「蟹の息の根を止めてあげましょう」とばかりに矢を放つが、外してしまう。

行動順の高いウェイクは『フォース』²¹を唱える。(キト「せっかく『ファイアウェポン』をつけてやってるのに…無駄に消費させやがって。’)キトの努力空しく、戦闘員二人に対し、致命的なダメージを与えることに成功した。

そして、ガットゥーゾはバルダーに対し『エネルギーボルト』を唱える。抵抗には成功されたものの、これがトドメになった。

バルダー「こんなはずでは～だぎゃ」
マスター「と言ってバルダーは倒れ、ハイドンは解放された。」
ハイドン「俺に当たるとこだったな。危なかったよ(笑)」

¹⁹ 魔法は通常より多く精神力を消費する事によって、その効果を高めることができる。ちなみに、ギジャの牙はこの消費のランクを1段階高める効果があり、2倍消費を通常消費と同じ扱いにできる。

²⁰ 今後キト関連でたくさん出てくるが、肉体を強化する系統の魔法『フィジカルエンチャント』。器用度を高める『シャープネス』、敏捷度を高める『クイックネス』、筋力を高める『ストレングス』が今回でてる。何とかネスだったら肉体が強化されると覚えて差し支えない。

²¹ 僧侶呪文で気を放ち、物理的ダメージを与える。一番近いのが発剷なんだろうな。やっぱり。

リーダーが倒れてしまい、戦闘員達は必死に抵抗を続ける。が、この状態になってしまえばもう、どうしようもなくキトの『エネルギーボルト』一斉射撃によって壊滅した。

マスター「君たちが蟹のバルダーを倒した頃には周りの戦闘もほぼ終了していた。死亡者ゼロ」

ガットウーゾ「むしろ俺たちが遅かったんだな(笑)」

メルララ「今井はどれくらいダメージを負ってるの？²²」

ウェイク「うーんと…残り2点」

メルララ「『ヒーリング』²³。抵抗していいよ。」

ウェイク「いや、しない。」

マスター「バルダーはいまわのきわに - 」

バルダー「もう遅いだぎゃ！我々の軍勢がタマサイ城に向かって侵攻中だぎゃ…ガクッ」

キト「情報をありがとうよ！(笑)」

ハイドン「時間稼ぎだったのか…」

マスター「まあ、聖闘士星矢の時代から蟹は弱いって決まってるからねえ…²⁴」

第3章 な、なんだってー！！

そして2日ほどの行程でタマサイ城に一行は到着した。

<タマサイ城>

西ネイルの王城。平城のため、守るには不向き(城壁はあるが)、城塞都市としては広いわけでもない。元々西ネイルは緩やかな連合のため、タマサイ城は連合の首長としてだけの機能が中心なのである。

ハイドン「平地にもっこり立ってるんだな。もっこり。」

マスター「二度言うかフツ…」

ハイドン「二度でも三度でも言うだろ！！(笑)」

今のところ、敵影は見えない。一行は城門に向かうが…

見張り「これはシリス様、おかえりなさいませ！」

ウェイク「ツンデレのお嬢様設定か…」

シリス「父上はどこ？」

見張り「陛下なら謁見の間におられます。」

ガットウーゾ「偉い奴だったんじゃね？」

ウェイク「お姫様だったんだ。ツンデレだから。」

²² メルララの発言だがメルララの中の人言葉だか意味不明

²³ 精霊魔法の一つ。名前の通り傷および病を癒し、全快させる事ができる。ちなみに、ユニコーン(生命の精霊)の力を借りて行うため、処女好きのユニコーンに気に入られる処女じゃないと唱えられない、と見せかけて女性だったら唱える事ができる。この処女がいいけど、女だったら誰でもいいという流れは独身男の悲しい悲哀を思い出させて筆者はこの魔法の事を思うと涙が止まらない。

²⁴ こちらのURLを参照。我々の世代には一般的な話である。

http://www2.plala.or.jp/vaio/L&M/LOGIC&MATRIX/diary/text_awards_002_seiya.htm

ハイドン「そういうキャラクター昔いた。ソニア・タカビーズ(マスターに)お前が出したんだよ」
マスター「俺が！？…つまり、俺は昔から既にツンデレを先取りしていたというのか…？」

などと言う戯言はおいておいき、一行はシリスの父上、国王に謁見する。

国王「私は西ネイル国王、ウララワ十三世！」

ガットゥーゾ「もう浦和でいいよ…呼びづらいよ(笑)」

シリスは国王に対し、ヘルハザードの危機を訴えるが、国王は聞く耳持たない

ウララワ13世「何をバカな言を…いい加減おとぎ話は卒業したらどうだ。」

ハイドン「まったくだ(笑)…独り言だから」

シリス「…じゃあ質問を変えるわ。この城の地下には何があるの？」

ウェイク「…なななな、な、何もないよ。(笑)」

ハイドン「なぜお前は一人芝居を続ける？(笑)」

タマサイ城地下に関してシリスは必死に訴えるが、国王は何も語らない。唯一キトとメルララは国王が動揺しまくっている事に気がついたが…

ハイドン「キトとメルララはできている…？(笑)なんかアイコンタクトとってるぞ。」

キト「レプラコーンがいっぱいいる？頭の中に？(笑)」

ウェイク「この城には地下というものがあるのか？」

ウララワ13世「うむ。倉庫があるが…」

メルララ「では王様。私たちが地下を検めてあげます。」

ハイドン「無償で！検めてあげます(笑)」

ガットゥーゾ「初めて会った相手にすげー失礼だ。」

メルララ「だって貴族だもん。トコロザ名門の私が！(笑)」

ウララワ13世「いや、せっかくだが遠慮しておく。いくら娘の友人とはいえ、いきなり人の家に押しかけて冷蔵庫を漁るような真似は失礼ではないかね！？」

キト「よくあるじゃないか。テレビ番組で、お宅訪問とか知らないのか？「となりの晩ごはんとか」！(笑)」

ハイドン「魔法のしゃもじ。これを持ってるとどんな家でも入れる！(笑)」

そんなもんはない。

ウララワ13世「まあとにかく、君たちは長旅で疲れているんだからゆっくり休んでくれたまえ。」

ウェイク「強引だ…」

ガットゥーゾ「我々程度、倉庫で充分でございます！(笑)」

ウララワ13世「そういうわけにもいかん。客間に通させてもらおう。」

ハイドン「じゃあロイヤルスイートをお願いします。」

えーと…何様のつもりだ！

さて、一行の抵抗(?)も空しくフツの客間に通された。しかし、懲りない面々は抜け出して探索を開始する。

キトおよびガットウーズが『カメレオン』²⁵。メルララが『インビジビリティ』²⁶を唱え、こっそり部屋を抜け出して、地下に向かう。残りのメンバーは部屋で待つ。透明 3 人組は迷子になりそうになりながらも城の地下に向かうが……

マスター「そうすると、君たちが地下に向かっていると老人が通りかかった」
老人「もし、そこの方々……そんな事をしなくても、私の方からお話するつもりだったので……」
マスター「と、声をかけてきたよ」
キト「シーッ！(笑)」
メルララ「その老人って人間？」
マスター「まあ、身なりのよい服を着ている事などから、レベルの高い魔法使いであることは推察されるが……」
ガットウーズ「俺は集中解きたくないから筆談で……(笑)」
メルララ「普通に話したほうが楽だぞ」

ということで、3 人は透明化を解いた。

老人「よかったよかった。そこで逃げられたら、殺さなくちゃいけないところでしたよ」
マスター「と、言ったわけでもないが」
メルララ「じゃあ何と言ったんだよ(笑)」
老人「もしよければ、そちらの部屋でお話をしたいのですが……」
ガットウーズ「どうしよう……(ハイドンを見る)」
マスター「ハイドンに聞いてちゃ駄目だよ。この場にはいないんだから」
メルララ「じゃあ、部屋に行こうか」
マスター「さて……ハイドンとウェイクは、透明になった連中が老人に連れられて戻ってきている」
ハイドン「早かったな」
ウェイク「そちらの御仁は？」
老人「私は宮廷魔術師のリベリウス。先ほども謁見の間でお会いしましたが、シリス様より相談を受けて、あなた様方に事の次第をお話しようかとやってきました。」
ウェイク「是非、知りたいところですね。この城の秘密を！」
リベリウス「あなた様方は何故、このような所に城があるのかと思われたと思いますが……」
メルララ「全く！」
キト「守るに難く、攻めるに易いところ！」
ハイドン「奪われた時に取り戻しやすいようにだ。」
ガットウーズ「王様が自分の力を誇示したかったのでは？俺は野戦の天才だ！」
マスター「だったらもっと大きい城にするさ」
リベリウス「もともとは、この城は古代王国の遺跡を封印するために建てられたものです」
ウェイク「な、なんだってー！！(MMR調ね²⁷)」

²⁵ 魔法使いの呪文。名前の通り、カメレオンのように背景に溶け込む。精神集中している限りは動くこともできる。

²⁶ 精霊使いの呪文。名前の通り、透明になる。これも精神集中している限りは(略。してみると、ドーゆー差があるんだらこの2つの呪文。

²⁷ 「週刊少年マガジン」で連載されたMMRこと「マガジンミステリー調査班(MAGAZINE MISTERY REPORTAGE / マガジン・ミステリー・ルポルタージュ)」の物語。メンバーはキバヤシ(リーダー)・ナワヤ・タナカ・イケダ・トマルの五人。当初はMMRのメンバーが様々な超常現象を科学的に解明していくというストーリーであったが、次第にノス

リベリウス「ということは、この城の地下には古代遺跡が眠ってるんだよ！(キバヤシ)²⁸」
一同「な、なんだったってー！(ナワタ他)²⁹」
リベリウス「この都市の地下には古代王国の空中城塞が眠っているということなのです」
ハイドン「ということはこの城の地下にはお宝がザクザク！ようし、掘るぞー！」
ガットゥーゾ「城塞を封印しているということ？ラピュタは本当にあったんだ！」
リベリウス「そういうことです。まあ、封印するという目的がありますので、あなた方を案内する事はできませんが…」
ガットゥーゾ「封印を解けばいいんだな、じゃあ。」
メルララ「うむ」
リベリウス「その昔、空中城塞があったころは世界は炎に包まれ、「火の七日間」と呼ばれる戦争が…あったとかなかったとか」
ガットゥーゾ「やべえ、巨神兵だよ。」
リベリウス「ということで、封印を解くと何がおこるかわかりません」
ウェイク「またひとつ…村が死んだ。」
ハイドン「違う違う。またひとつ…村が腐海に沈んだか…だよ。³⁰」
リベリウス「ヘルハザードとか言うのが何者かは知りませんが、どこからかこの情報聞きつけたのでしょうな」
ウェイク「やっぱり、その空中城塞にはもの凄い力があると？」
リベリウス「もちろん。膨大な魔力が蓄えられていると伝えられています。」
ハイドン「で、国王はそれを封印したままにしておきたい？」
リベリウス「それももちろんです。だから、地下に何かあるという事にもしておきたくないのです。」
ガットゥーゾ「国王だめだなあ。兵器が悪いんじゃない。使う人間次第なんだよ！」
メルララ「シリスはその事を知っているの？」
リベリウス「いや、いずれお話するつもりでした。」
ウェイク「そういえば御仁、ヘルハザードについて何か知らないか？」
ハイドン「そういえば、お前、あの変な語尾どうしたの？だぜえ～って(笑)さびしいのか？」
マスター「さびしくないよ！でも、リプレイを書いている内にわかってきた。序盤は普通なんだ(笑)」
メルララ「後半になるとあがってくるんだ。」

トラグダムスが残した予言詩をストーリーの軸に据えることで1999年7月に人類が滅亡することを煽ったため、1990年代は全国の小学生を恐怖に陥れた。ネットの境界でMMR隊員が言うフレーズ「 の正体(事実)は××だったんだよ！」「な、なんだったってー!!!」がよく使われる。



28



29

³⁰ もう調べるの面倒なのでこら辺の台詞の一連のネタ。『ラピュタ』『ナウシカ』(宮崎駿)ね。詳しくは調べてくれ。

マスター「で、次は人の台詞を取る」

リベリウス「まあ、明日国王と話して、封印を解くまでもいかないまでも、少し情報を整理しましょう。」

ということで、衝撃の事実と共に一行は眠りについた。

第4章 炸裂！ライトニングクロス！

マスター「さて、君たちが『明日どうなるのかなぁ』とワクワクして寝ていると、君たちの部屋のドアが開いて、シリスとロッツが現れました」

キト「よ、夜這い？」

ガットウーゾ「わ、わ、わしーっ！？(笑)」

シリス「ロッツが戻ってきたわ。ヘルハザードの軍勢を見つけたわ。タマサイ城の西に布陣している。こっちから行って殲滅するわよ！」

ウェイク「正規の軍隊で蹴散らせばいいじゃないか。」

ロッツ「もちろん、シリス様の名において、100人の騎士は出す。また、われわれガーディアンズが50名。敵の軍勢はおよそ400。」

メルララ「陽動の可能性はないわけ？」

ロッツ「わからん。かといって、放置もできまい。」

かくして、一行はロッツ・シリスと共にヘルハザードの軍勢に対抗するために出陣することになった。一行は騎士団長に会うことになる

マスター「騎士団長が一人、ドワーフだけど。」

キト「馬には乗れてるのか？」

マスター「なんとか。」

ハイドン「なんとか乗れている人が騎士団長なのか？(笑)」

騎士団長「お主がハイドン殿か？」

ハイドン「いかにも！」

騎士団長「私がネイル王国騎士団長サイドン！」

ハイドン「サ、サイドン？」

サイドン「われわれは似ているな。名前といい、よろしく頼む！」

ハイドン「言っておくが、私は人間だぞ。」

ウェイク「またまた！」

サイドン「謙遜を…これほどの勇者がドワーフでないわけがない。」

ハイドン「む、むう…(笑)」

さらに、シリスの権限で城の宝物庫を漁る。色めきたつ一行

シリス「足手まといはお断りだから、城の武器庫を漁るわ。この中から好きなものをもっていきなさい。」

キト「漁るの？」

ガットウーゾ「ソウルクラッシュハッケーン！！(笑)³¹」

ウェイク「ビームサーベルハッケーン！！(笑)³²」

ハイドン「ロウフルブレードハッケーン！！(笑)³³」

マスター「妄想の中で使えばいいさ！妄想の中で使う分には文句は言わないさ！」

メルララ「ゴキジェットハッケーン！(笑)³⁴」

ただし、ウェイクだけは…

マスター「さて、ウェイク。周りの連中が『生命の王錫』～、とか言っている間に君はひきつけられるようにして武器庫の奥へ向かうよ」

ウェイク「(ドクン、ドクン)これいい、すげえ欲しい。…この石仮面なんかすごい着けてみたい³⁵。」

マスター「奥の方にチャ・ザの紋章が刻まれたレザー・アーマー(皮鎧)がある。」

ウェイク「パッチグーじゃん！まさしく俺のためのユニフォームじゃなーい？」

ガットウーゾ「これを着けると、一步ごとに1ガメル拾うんだよ。」

マスター「勝手に効果作るな。で、手に取ると鎧の名前がわかりました。…『モウ・ハンチャの鎧』³⁶(笑)」

ウェイク「こ、これは果たして呪われているのか？でも、チャ・ザの紋章が刻まれているしなあ。」

キト「全然呪われていない。大丈夫だ。着れ。」

ウェイク「チャ・ザの紋章刻まれているしなあ…じゃあ、着けてみよう。」

マスター「着てみると、効力がわかりました。」

メルララ「デケデケデケデケデケデケデケデケデケデケ」

マスター「魔法の+1レザーアーマー(ダメージ減少+1)。で、特殊能力が2つあります。」

1. 商談(取引)に限り、動物・魔物、妖魔とも行う事が出来る(言語が通じる)
2. 「もう半壮」と叫ぶことで精神点を6点回復させる。1日1回

³¹ ベルド、アシュラムの使った剣。『ロードス島戦記』より。このシーン他にも魔法の武具の名前をPCが連呼しまくってたが、解読できたのはこの3つだけだった。

³² これ魔法の武器じゃないがな。ガンダム。

³³ 法の剣(ローフルブレード)。ロードス島のヴァリス王国に伝わる三聖具の一つ。

³⁴ 魔法の武器ではない。ゴキブリ退治に無双の威力を発揮するスプレー。いや、これマジで強力だよ。ママレモンの次にゴキブリへの効果が高いですわ。

³⁵ 魔法の武具っつうか普通の仮面ではない。『ジョジョの奇妙な冒険』第1部から登場し、主人公を世代を超えて数奇な運命に巻き込んだ原因となった、古代アステカで作られた仮面。



³⁶ モウ・ハンチャ。ダンナ、ライデン等と並ぶACRAPの有名キャラクターの一人。風貌はこんなだが、ただの商人のおっさんである。が、その裏声、三角の目、悪徳商人っぷりが伝説となっている。一行が引くのもむべなるかな。



さらに、一行が発見した魔法の品物は以下の通り

- ・ 魔晶石 (12 ポイント分)
- ・ 高品質の武具 (+ 5 相当) ハイドンのラメラーマーマー³⁷を始めとして一行は身に付けている防具を強化。(ただしウェイクは『モウ・ハンチャの鎧』を入手したので除く。)

さて、一行を含んだ西ネイル騎士団は出撃し、ヘルハザードの軍勢と対峙する事になるが…作戦会議が始まる

マスター「さて、そういうことで軍議が始まるよ。あと 1 日か半日程度で接触する。戦場となるのはチティブ野。特に起伏とかはあまりない。ちなみに、天気は今は晴れ。」

ガットゥーゾ「今は？」

マスター「そりゃ、予測してもいいよ。レンジャーにそういう技能あったでしょ？」

メルララ「できるのか？」

マスター「もちろん、あるよ。」

同じく精霊使い(シャーマンである)キトが1ゾロ…

キト「土砂降りだ！！(笑)」

メルララ「(平気な顔でサイコロを振る)…15」

マスター「うーむ、雨が降りそうな様子はないねえ。ここ2、3日」

ハイドン「私は雪が降ると思っていたれば」

マスター「戦力としてはこっちが150、相手が400と予測されているのでね。正面から当たらず、作戦を練ることになる」

ガットゥーゾ「呂布³⁸が一人いれば、500人は斬っている！」

マスター「お前呂布じゃないだろ。で、作戦会議始めよう」

ウェイク「われわれの使命は奴等を殲滅する事？それともここを守り抜くこと？」

マスター「殲滅することだね。」

ガットゥーゾ「でも、これが第一陣だったらなあ…(笑)」

³⁷ラメラーマーマーは、ロウで固めた鎧とも、板金鎧とも言われているが、詳細は調べてみないとわからない。細かい鉄板を重ねたものと思うのが普通か。ちなみに日本の武者鎧もラメラーマーマーにあたる。1枚板ではない点で西洋の騎士の装着しているプレートアーマーとは区別される、んじゃない？



³⁸呂布(りよぶ、ピンイン:Lǚ Bù (リュイ ブウ) 生年不詳 - 198 年)は後漢末期の武将、群雄。字は奉先。五原郡九原県(今で言う内蒙古自治区内)の生まれ。戦乱の後漢末期にあって、その武勇を誇った。三国志最強とも誉れの高い武将である。なんで呂布でイメージググると一番左が最初に来るんでつか？一番右がよかったのに、でも真ん中が個人的には一番ヒットだな(蒼天航路)。

それより気がついたんだが、ガットゥーゾの発言には調べなくちゃならないものが多い。



マスター「まあね。だから、なるべく被害も最小限に抑えたいところだね。」

ガットウーゾ「なかなか無茶を仰るのう……国王も……ハッハッハッハ(笑)」

ハイドン「まずは前進している敵を並べる方法を考えようよ(笑)」

ウェイク「そこにライトニング？」

ハイドン「おだてる、と。あなた達の数数を数えてあげます(笑)³⁹。そのための道具(ウェイク)だからね。」

マスター「まあ、君らも作戦会議にはいるから、そういう突拍子もない策でなければ検討するよ。」

ハイドン「真面目な策だったんだけど。」

マスター「……なんだその作戦？」

ハイドン「……むううううう！(笑)」

メルララ「狭い地域に敵を集めるようにすれば、少ない人数でも対等に戦えるわよ。ってギジェットに言わせよう。」

ハイドン「ギジェット？」

ガットウーゾ「俺はガットウーゾだ(笑)」

メルララ「ガットウーザ？」

ガットウーゾ「ガットウーゾ！(笑)」

マスター「……まあ、ギジェット(ガットウーゾ)がそういう風に提案するが(笑)、「じゃあどうやって集めるのだ？」と聞かれたよ」

キト「その前にそういう地形はないの？」

マスター「まあ、若干の起伏はあるんだが、せいぜい高低差4,5メートルだぞ。ゆるやかだし。切り立ったという程ではない」

メルララ「その土を泥状にしておけば、弓矢で狙いたい放題！」

ハイドン「落とし穴掘ろうか？古典的に」

マスター「(400人をハメる)落とし穴を掘る時間があると思うか？」

ハイドン「ないのか……」

ハイドン「焦土作戦⁴⁰」

マスター「焦土作戦！？(笑)」

ハイドン「もうこの城は捨てる！

キト「で、城に集まったところを見計らって……」

ハイドン「メテオストライク⁴¹、あるいは細菌兵器。」

キト「あるいは中性子爆弾」

ウェイク「サイランドごと吹っ飛びそうだな」

³⁹ 因幡の白兔だね。古事記より、インテリだね、ハイドンの中の人。

⁴⁰ 焦土作戦(しょうどさくせん)とは、防御側が、利用価値のある建物・施設や食料を焼き払い、攻撃側に利便性を残さない戦術の一種。つまり侵攻する敵軍に食料・燃料の補給・休養等の現地調達を不可能とする戦術。銀河英雄伝説では、銀河帝国領土深く侵攻してきた自由惑星同盟軍に対し、帝国軍は辺境惑星の食料や物資を殆ど持ち出すと共に住民を置き去りにした。『悪逆な専制政治からの銀河帝国国民の解放』を侵攻の大義名分とする同盟軍は住民の食料の面倒も見なければならなくなり、同盟軍の食料補給上の負担は飛躍的に増加。さらに、食糧不足による将兵の疲弊と士気低下が一大要因となってアムリッツァ会戦で大敗する。

史実ではナポレオンとロシアが有名。ノンフィクションと史実の順番が逆だったか。

⁴¹ 隕石を落とす魔法。魔法使いの魔法の中でも最強の威力を誇る魔法だが、今回の話の中で使える人は誰もいない。

ハイドン「俺たちは一介の冒険者だから、わからない！で、プロのサイドン達の案は何なの？」
サイドン「騎士団を鋒矢の陣で突撃させる！で、敵陣を突き抜けて、混乱している間にガーディアンズが後方から敵の本体を奇襲するという作戦だ(図 2 戦術イメージ)」
ウェイク「我々は別働隊ってわけね。」
ガットゥーゾ「一人三殺すればお釣り来るしな。」
マスター「こっちには騎士団がいるしね。その機動力を活かさないと」
ハイドン「じゃ、その案を採用しよう！」
マスター「偉そうだな(笑)。そっちも策をちったあ考えてくれよ」

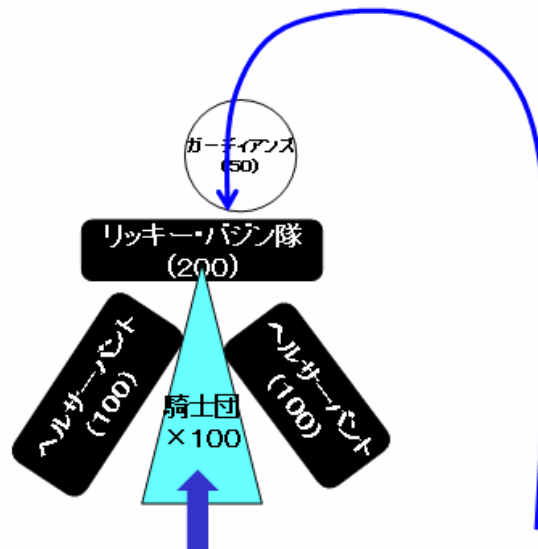


図 2 戦術イメージ

さて、一行はガーディアンズに組み込まれ、騎士団が混乱させている間に背後から本隊(リッキー・バジン隊)を急襲する事になった。

戦争は始まった。

騎士団が鋒矢の陣でヘルサード勢に突撃するが、中央の本隊を突破できていない。(ハイドン「トロールだ！」)トロールではないが、本隊には重装甲(フルアーマー)タイプの的があり、手こずってしまっている。

そこで、騎士団の突破を支援するためにも一行を含めたガーディアンズ隊が本隊の背後から強襲することにした。(ウェイク「まだ早いけど、しょうがないから今行かないとって事ね。最悪じゃないか」)

シリス「私たちは敵の大將を倒しにいくわよ。着いてきなさい！」
キト「ええっ！？突破してよあ」
ガットゥーゾ「うちら外様だし…(笑)」
マスター「外様言うな」
ウェイク「ゲロかったりい」

マスター「さて、ガーディアンズ隊は後ろから突っ込んだよ。その数50人」

ハイドン「大部隊じゃん。」

マスター「敵も200人だが。」

ガットウーゾ「一人4人倒せばいいのよ。増えちゃった(笑)」

ハイドン「費用対効果悪いな。グダグダじゃん。」

ウェイク「まあ、やるしかないでしょ。」

後方からの奇襲は効果があったようで、一行は敵の大將のいる本陣までたどり着くことができた。

マスター「敵の大將と思われる男が」

大將「この俺、竜のバジンをなめるなよ！」

マスター「と、槍を持って、ウロコが生えて、襲い掛かってきたよ」

ハイドン「ホタテの癖に！(笑)」

ガットウーゾ「皆まで言うな。背中を見ればわかる」

キト・ウェイク「ホタッテ～～(笑)」

かくして、一行とシリスはバジンおよびバジンの護衛3人(ヘルサーバント・ブラッド・・・強化型)との戦いに突入する。

<第1ラウンド>

ここで、ソーサラー3レベルになったキトは(既に3レベルになっている)ガットウーゾと共に『ライトニング』を唱える。交差した光線がバジン達を貫く

キト「我々の必殺技、ライトニング・クロス！くらえ～っ！」

ガットウーゾ「俺たちのライトニング・クロス！(図3 必殺 ライトニング・クロス！！)」

ハイドン「すごい。カッコいい～」

ガットウーゾ「でも、1ゾロだったりして(笑)」



図3 必殺 ライトニング・クロス！！

ガットウーゾの心配は杞憂に終わり、この一撃はバジンとその護衛たちに壮絶なダメージを与える。特に、交差の中心にいたバジンには致命的なダメージを与えることに成功した。交差させた甲斐があったのか、キト側のライトニングがバジンに対してクリティカルヒットを発揮したのだ！

メルララ「ライトニング・クロス、いいぞ。なかなかいいじゃん。」
そのメルララはバジンに対して弓で狙いをつけて終了。

そして今度は、敵が一斉に一行に対して反撃をしかける。ライトニング・クロスのため、(何故か前線にいた)ガットゥーゾにバジンと護衛二人が攻撃する。

ガットゥーゾ「俺死んじゃうかもしれない」

メルララ「生きていればヒーリングしてあげるから」

マスター「じゃあ、攻撃ね。ヒートワイヤー！」

ウェイク「ザクとは違うのだよザクとはぁ！」

マスター「いいから避けなさいよ。」

よけられず命中。ついでにもう1匹の攻撃(ヒートワイヤーではなく、ブレードアーム)も命中し、ガットゥーゾは瀕死状態になってしまう。そこへ更にバジンの攻撃

マスター「殺す気マンマンでいくからね。避けて。」

ガットゥーゾ「ライトニング・クロスが俺の最後の技に……」

しかし、この攻撃は奇跡的に回避する

ガットゥーゾ「俺生きてるじゃーん！！」

マスター「……あ、忘れてた。2発目の攻撃は毒だ。」

この毒の結果、ガットゥーゾは3ラウンド麻痺してしまう。

ガットゥーゾ「ここで麻痺なんかしたら俺脱糞しちゃうかもしれない(笑)」

更に、二人の護衛がウェイクとハイドンに1匹ずつ攻撃するが、二人は息の合った回避(同値)を見せて避ける。

続いて一行のターン。シリスはガットゥーゾを回復(9点)させて、ウェイクは『フォース』を唱えるが抵抗に成功されてしまう。一方ハイドンは相変わらずのカチ割り丸で1匹を吹っ飛ばす
ハイドン「うがーっ！行くぞガットゥーゾ！まっとれえ！」

<第2ラウンド>

キトは『プロテクション』をガットゥーゾ、ウェイク、ハイドンに唱えてガットゥーゾの生存確率を上げる。ないよりはマシ。

ガットゥーゾは麻痺しているため、行動不能。メルララは狙いを定めたバジンに対して矢を放つ。しかし、クリティカルヒットはせず、まともにダメージを与えられなかった。

ここで(配置が非常に都合がよかったので)バジンは驚くべき攻撃を行う

マスター「バジンが『ファイアプレス』の竜語魔法～！⁴²」

⁴² ソードワールドのルール上に存在する特殊な魔法系統である竜語魔法のうちの一つで、名前の通りドラゴンの吐息が如く炎を放射する。竜語魔法は名前の通り、ドラゴンおよびドラゴン・プリーストにのみ伝えられている魔

ウェイク「は！？」
ガットゥーゾ「ホタテの癖に(笑)」
マスター「竜のバジンって言ったやん！」
キト「ホタテが竜語魔法？傑作だなあ(笑)」

ガットゥーゾとメルララ、キトが射程の範囲内にいた。メルララが6点、キトには1ゾロでダメージなし。ガットゥーゾには7点のダメージとなり、結果この2人は生命点が半減する。ガットゥーゾには護衛が更に追い討ちをかける。これにより残り1点。となるが、更に毒によって生命点がなくなり、気絶してしまう。生死判定には成功したので、生きてはいるが…
ウェイクとハイドンはまたしても仲良くヒートワイヤーにからまってしまふ、が。高い冒険者レベルと『プロテクション』効果によってダメージは受けなかった。

ハイドン「キン！」
マスター「ダメージはなしが、ただし絡まったから動けないし、攻撃もできないよ。」
ウェイク「攻撃はできるよ。『フォース』は使えるんだ。」
マスター「あ、そうか。」
ハイドン「俺もできるよ、カチ割り丸だから」
マスター「カチ割り丸にそんな機能はない！(笑)」

ウェイクは予告通り『フォース』で一人を仕留める(ウェイク「バカめ、近づいたのが運の尽き！」ガットゥーゾ「関係ねえよ(笑)」マスター「殴ってから言えよ(笑)」)
ハイドンは筋肉でヒートワイヤーをぶった切り、逃れる

ハイドン「もうこのワイヤーは使えないな…ぶった切ったから」
マスター「……」
メルララ「ごもごもごもごもごも(笑)」

シリスは(メルララにせかされて)『キュア・ウーンズ』をガットゥーゾに唱えて回復させる。が、麻痺しているので活躍の舞台は訪れない、であろう。

< 第3ラウンド >

キトは再び『ライトニング』を唱える。バジン含めた残りの護衛二人を軌道上に捕らえ、全員共抵抗に成功するが、護衛は瀕死状態になった。続いてメルララ
メルララ「『デストラクション』の5倍消費！(笑)」
キト「必死だな」
メルララ「だって(またさっきの『ファイアブレス』を)唱えられたら終わりだから。」

結果、バジンは『デストラクション』⁴⁹によって魔法の詠唱を妨げられてしまう。このため、キトへ槍で攻撃し5点のダメージを与える。

法。

⁴⁹ 対象の精神集中を阻害する魔法。これにより、他の魔法を唱えることはできなくなる。ただし持続時間は一瞬(1ラウンド)である。

続いて、ウェイクとハイドンに対し、また護衛二人が攻撃を行う。が、二人の調子はよく、マトモにダメージを与えられない。しかし、ウェイクが毒を受けて6点のダメージを受けてしまう。しかしそれでもウェイクとハイドンは粘りを見せ、護衛二人を倒す。これで残りはバジンだけとなる。しかし…

マスター「と思ったんだが…援軍登場」

キト「こっちの援軍だって(笑)…助かったぁ…」

マスター「そういうわけにはいきませんはな。後ろから援軍が来ました。一人がバッファローマンみたいな容貌⁴⁴をした敵と、その配下、重装甲タイプなのが2匹」

ガットウーゾ「なんとまゝ…3匹か。」

<第4ラウンド>

キトはこれでもかとはばかりに三度『ライトニング』を唱え、バジンは音もなく倒れる。これで、残りは今登場した援軍の3匹のみとなった。

ハイドン「バッファローマンは俺が挑発する。ハゲ、ハゲ、ハゲ」

ウェイク「なんで知ってるんだ？」

ハイドン「ハゲ。なんだその腕のものと足のものは、ハゲ？(笑)」

キト「そりゃ怒るわ(笑)」

メルララは重装甲タイプにたいし弓を射るが大したダメージを与えられない。更に、ガットウーゾが『ライトニング』を放ち、6ゾロ(ガットウーゾ「これは抵抗できまい！」)。これによって相当のダメージを与えるが、まだ生きている。

シリスは(後方に下がりながら)メルララを回復させ、ウェイクが重装甲タイプに『フォース』でトドメを刺す。(ウェイク「フォースの力を信じて！」)

ハイドン「じゃあ、ワシがバッファローマンとタイマン勝負しよう！」

マスター「じゃあ、他の奴は手を出さないの？」

ハイドン「いやその…出されちゃったものは、しょうがないんだけど(笑)」

気合と共にハイドンはバッファローマンもどきにダメージを与えるが、倒すには至らなかった。そして…

マスター「じゃあ、そいつはかがみこみ、後ろ足で地面をかき始めた。あ、これ(敏捷度的に)ハイドンの前だね」

⁴⁴ こんな容貌である()



ハイドン「まあ、関係ないでしょう。」
メルララ「じゃあ、(ハイドンの攻撃が)あたってその行動は制限されたんだね？」
ハイドン「どっちにしろ、接敵しているからチャージはできないでしょ。」
マスター「チャージじゃないよ！ハリケーンミキサーだよ！」

<第5ラウンド>

バッフアローマンもどきはハリケーンミキサー(もどき)の待機中となり、次のラウンド。

ガットウーゾ「じゃあ、俺そのあいつの背中の乗ってロングホーントレイン(笑)」「
キト「逆だから！(笑)」

ロングホーントレインもといハリケーンミキサーもさせまいと、キトはハイドンとメルララに『クイックネス』を唱えて敏捷性を高め、行動順を早める。メルララも『ストーンブラスト』を唱えるが、まだハリケーンミキサーは止まらない。さらにガットウーゾはハイドンに『ストレングス』を唱えて筋力を高め、与えるダメージを高める。

ハイドン「うおお～！鼻血出てきた(笑)」「
マスター「あとはウェイクだね」
ウェイク「『フォース』をバッフアローマンに唱えるよ。」
ハイドン「やべ、仕留められちゃったらどうしよう(笑)」「
ウェイク「……1ゾロ～っ！(笑)」

重装甲タイプはそのウェイクに突撃し、ウェイクは吹っ飛ばされる。

そしていよいよハイドンの番である。

ハイドン「殺す、処刑する！(クリティカルヒット)」「
26点の大ダメージを与え、バッフアローマンもどきは倒された。

二人の大将が倒された事で敵軍は潰走した。

ハイドン「いいよ俺は『クイックネス』『ストレングス』残っている内は暴れまわるよ。鬼神の如く！」「
キト「いつの間にか器用度も上がっているから(笑)そのうち熊になる」

かくして、戦いには勝利する事ができた。とはいえど、騎士団・ガーディアンズの損害も少なくなかった。(ガットウーゾ「その中に俺も入ってる(笑)」)

一行は城に帰還する。
ところが、城もまた混乱の最中であつたのであつた。

第5章 ウェイク、暗闇に死す！？

マスター「ゆっくり戻ったんだが……城は煙が出て、大騒ぎで人の悲鳴なども聞こえる」
キト「こんなところでサンマ焼くなんてー！(笑)」
ガットゥーゾ「炊飯してるんだ。火を焚いているだけだよ - 」
マスター「爆発した！」
ハイドン「へ？(笑)」
マスター「「助けてー」という声も聞こえる」
ハイドン「あらららら、しょうがないな。じゃあ走って行こう！」
マスター「君たちが慌てて行ってみると、タマサイ城は大混乱である。」
ウェイク「じゃあ俺たちも混乱していよう。バタバタバタバタ、ダバダバダバ」
マスター「見てみると、シオマネキが人々を襲っているね」
ガットゥーゾ「じゃあ王様を救いに行ってみるか……」
マスター「死にそうな兵士が「リベリウスが裏切りました……。あいつこそが敵の……ガクッ」と事切れたよ。」
ガットゥーゾ「ほら言わんこっちゃない、だからあの時俺が……」
ウェイク「お前が何したよ(笑)」

ウララワ13世は致命的な一撃を受け、既に虫の息であった。(メルララ「『ヒーリング』」マスター「却下」ハイドン「殺したい時はころしていいんだぞ(笑)」)王の遺言から、一行は城の地下に向かうことになる。

(ウェイク「逃げ！地下へ急ぐんだ！」)

一行は既に開かれてしまった扉を見つける。

マスター「扉があります。鍵はかかっていない、これが封印の扉らしい」
ハイドン「入る！開けた」
メルララ「用心して開けよう」
マスター「扉を開けると、通路が120メートルほど奥に続いているね。中は明るい。」
ハイドン「120メートル走った。」
キト「リベリウス倒した(笑)」

ガットゥーゾ「一列にならないように歩こうぜ。」
メルララ「あ、そうか。(ライトニングが怖いから)」
ハイドン「じゃあ、五角形(ペンタゴン)でフォーメーションを組んで歩こうぜ。」
マスター「シリスとロツソは？」
ハイドン「真ん中で(笑)」
ウェイク「誰かが狙われても必ず当たるの(笑)」

まあ、フォーメーションはともかく、一行は前に進み続ける。ところが……

マスター「ゴゴゴゴゴ……という感じで軽い地震が起きはじめた。」
シリス「もしかしたら、封印が解かれるかもしれない……みんなを避難させないと。」

シリスは近くの兵士に言づけて住民の避難を行わせた。しかし、一行は先に進み続けた。

マスター「両側に壁画がある。」

ウェイク「シリス、これは一体何かな？」

シリス「私に聞いてもわかるわけないでしょ？」

ウェイク「(使えないな、この女)」

シリス「まあ、絵柄を見る限り、この空中城塞について描いたものでしょうね。」

マスター「空中城塞ができました、なぜか知らないけど暴走しました、ピームが出ました、ドラゴンと戦った、空中城塞は落ちて封印された、という感じの流れだね。」

メルララ「落下しても無事だったのか、さすが古代王国の産物だな。」

マスター「さて、廊下を進むと扉があります。」

ハイドン「ロツソ頼む」

キット「ロツソが開けました。」

ロツソ「…(こいつら、実質NPCだからって)…何も聞こえない」

ハイドン「じゃあ、開けるよ」

マスター「中は普通の四角い部屋。装飾も何もない。ただし、少女が氷漬けになっている」

ハイドン「裸で!？」

まあ、そうかもしれないしそうでないかもしれない。それでいいじゃないか。

マスター「何となく見覚えがある、遺跡の度に現れた少女に雰囲気似ている。」

ウェイク「この少女は!？」

キット「キョトンとしまくってた少女に似ているということね？」

ハイドン「鍵だな、この少女は…」

キット「『センスオーラ』生きているかどうかを調べるよ。」

マスター「氷からはフェンリルを感じるね。」

ウェイク「『アイス・コフィン』ですか。」

ガットウーゾ「じゃあ、これは溶かせないな。われわれの力では。」

ウェイク「とりあえず奴を倒すのが先だろ。先へ進もうぜ」

一行は少女が氷漬けにされている「導きの部屋」を出て階段をくだり、第1封印の中枢のたどり着いた(図4 第1層)。

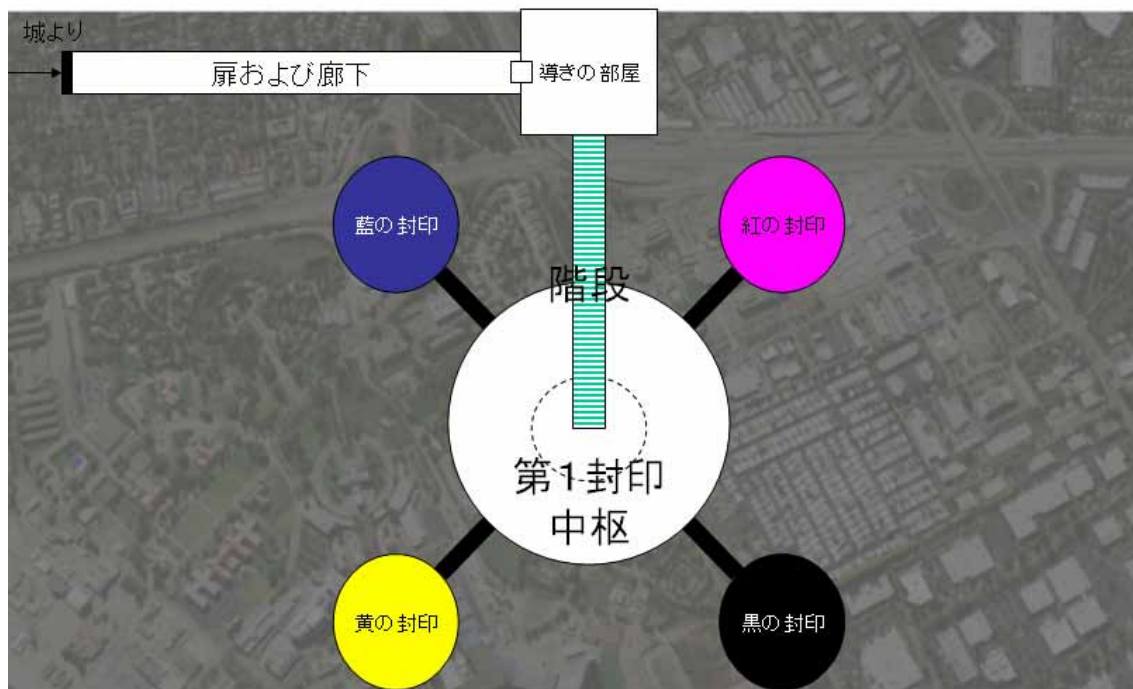


図 4 第1層

一行はロツソに調べてもらい、それぞれの扉を開けるが、先を見通す事はできない。一行は先へ進み、「黒の封印」の部屋に辿り着く

マスター「部屋は暗くて黒い、あ、黒いかなんてわかりゃしないな(笑)」

ウェイク「黒の魔力源だ！⁴⁵」

メルララ「ランタンで照らしてみる」

マスター「ランタンの光は届かないよ」

キト「『センスオーラ』。何かの精霊力は？」

マスター「何も感じない」

メルララ「矢を奥に向かって撃ってみる。」

ガットウーゾ「ギャー！とか(笑)」

ハイドン「コラ！今何時だと思ってるのかなお前は！(笑)」

マスター「矢を撃っても何も反応はないね。壁らしきものに当たった音はした。」

ウェイク「『ライト』で中和してくれる？」

ガットウーゾ「他の通路も見てみようぜ(笑)」

そして一行は、今度は「黄の封印」の部屋に辿り着く

キト「今度は黄色かよ。」

メルララ「残りも行っちゃおう」

それぞれの部屋に行ってみた結果、それぞれ藍、紅の部屋である事が分かる。

⁴⁵ 『ファーローズトゥロード』のルール。いかにウェイクの中の人が空気が読めない事を周知したくて記述してみた。

マスター「そうそう、言い忘れていたけど黄色、藍色の部屋の奥にはスイッチがあるよ」

紅の部屋にはスイッチがないが、茨に囲まれた柱がある

まあ、この展開からすればそれぞれのスイッチを押すだけであるが……

メルララ「じゃあ、黄色(の部屋のスイッチを押す)。」

マスター「誰が？」

メルララ「ポチ！(言いだしっぺ)」

マスター「さて、君が一步部屋の中に足を踏み入れた瞬間、君が身につけていた有機物および体が腐りだした。慌てて君が足を引いたため、そのまま腐るということはなかったけど。」

メルララ「(危ない危ない)じゃあ、矢でスイッチを押そう。」

マスター「(まあ許可するか、矢の先端は無機物だし)妥当だね、時間はかかるけど、矢で何とか押すことはできた。」

続いて藍色の部屋、藍色の部屋は床一面が水槽になっている。これに対しては、キトが……

キト「『ストーンサーバント』！⁴⁶」

マスター「それはいいでしょう。でも、石って周りにあったっけな」

残念ながら、人工的な施設であった事もあり、石はなかったのがあった。

メルララ「じゃあ、ここの部屋も矢で押そう。残りは？」

ガットゥーゾ「だから、紅と黒のスイッチは(見えないから)押せないからね」

藍色の封印のスイッチを押し、続いて紅の封印へ。

ガットゥーゾ「茨の柱に『ティンダー』を唱えて火を点けるよ。」

マスター「燃えた。茨は苦しんでいる、で茨の奥にスイッチがあるよ。」

メルララ「じゃあそれも(矢で)押そう。」

マスター「押した。」

こうして、黒の封印以外の部屋のスイッチは全て押した事になる。そして黒の部屋。

キト「じゃあ仕方ないな、本当は消費したくなかったんだけど……『ライト』。」

マスター「さて、ライトを唱えて、暗闇を晴らした感触はあったんだけど、依然として暗いままだね。」

キト「……だそうだ」

ハイドン「ワシの夜目でも効かない？」

マスター「あなたの夜目でも効かない。……ってお前ドワーフじゃないだろ(笑)」

さて、色々やってみるが暗闇は晴れなかった。

ハイドン「どうしょ？入っていく？」

⁴⁶ 魔法使いの呪文。名前の通り、石でできた召使、簡易型ゴーレムを召喚する。この簡易型ゴーレムはおバカさんなので大した命令は聞けない。3日でソフトウェア作るとか、3年かけてもいいからリプレイ書けとかは絶対に無理。

キト「手探りで調べていくしかないんじゃないか。あとは奥にスイッチがあるはずだ……」
ハイドン「じゃあ、ジャンケンで決めようか。で、入る奴にロープだけくりつけておいて、何かあったら引っ張ればいいよね。」
キト「そうだね。」

厳正なるジャンケンの結果、ウェイクが入っていく事になった。

ウェイク「うおおおおーっ。しょうがねえなあ、じゃあ俺が行ってやるよ。」
ハイドン「じゃあ、ロープ付けていくか。」
キト「でも端っこ持っていないから(笑)」

さて、こうしてウェイクはロープだけくりつけられては入っていくが……

マスター「ウェイク、生命抵抗をして。」

何が起きたか全くの不明であるがウェイクは2点のダメージを受けた。しかし、何かあるかわからないもののウェイクは根性決めて先に進み続ける。

マスター「じゃあもう1回。6ゾロは抵抗成功だね。でも6点のダメージ。こっちのダメージの目がよかった。」

マスター「はい、生命抵抗。」

ウェイク「またかよ！」

マスター「ああ、でもこっちが1ゾロだからダメージなし。でやっと壁についたよ」

ウェイク「ボタンがありそうな所を手探りで探す」

マスター「はい、またしても生命抵抗。3点のダメージ。見つけた」

ウェイク「押した！」

マスター「どこかでロックが外れた音がした。生命抵抗。4点のダメージ」

ウェイク「じゃあ、走って戻るよ。」

マスター「じゃあ、最後の生命抵抗ね。6点のダメージ。」

こうして、何者かの攻撃を受けながらウェイクは一行の元に戻ってきた

マスター「さて、ウェイクは体とか皮膚とかボロボロになりながら君達の所に戻ってきた(笑)」

キト「何があったんだお前は一体……何をどうしたらそうなるんだよ一体？(笑)」

最後にウェイクは『キュアウーンズ』を自身に唱えて回復していた。

ちなみにこの部屋の仕掛けであるが、『ダークネス』による暗闇と、『クリエイトイメージ』による真っ黒な幻覚が仕掛けられていただけであった。前者は解除したが、後者については解除しないまま突入した事になる。ちなみに、後者についても発見・解除は『センスマジック』『ディスペルマジック』によって容易であり、メルララが言っていた。

更にウェイクが受けたダメージはこの部屋にいたギズモ⁴⁷によるものである。1体しか配置していな

⁴⁷ ギズモと言えば映画『グレムリン』のこいつが有名である。が、ソードワールドの世界では、ゴーレムの一種であり、ガス状の怪物ということになっている。暗闇の部屋に仕掛けるには絶好の魔物であった。

かったので、ウェイクは辛くも生存できたが、5体くらいしかけておけばウェイクを瞬殺してくれたの
にと思うマスターであった…(ハイドン「すげー力技(笑)」)

マスター「さて、種明かしも終わったので中央の部屋に戻ると、下向きの矢印ボタンのついたコン
トロールパネルらしきものが部屋の中央の円形の切れ込みの中にできてる」

ガットウーゾ「ポチッと押す」

マスター「中に入って押す？外から？」

ハイドン「中に入って押すから。もちろん」

マスター「すると、おもむろに下っていきました。ま、エレベーターですな。」

一行はかくして下っていく…第2層()にも本当は仕掛けがあったのだが、時間の関係で省く事に
する。本当は壁面からガーゴイルの襲撃を予定していた(マスター「襲い掛かって…」ハイドン「来
ない!」)。

一方でこの地下城塞は上昇を続けているのであった…(ウェイク「この部屋が伸びているのか、
それとも目の錯覚なのか…(笑)⁴⁸」)

しばらく、下降(および上昇)を続け、ついに一行は最下層(図 6 最下層)に辿り着く。

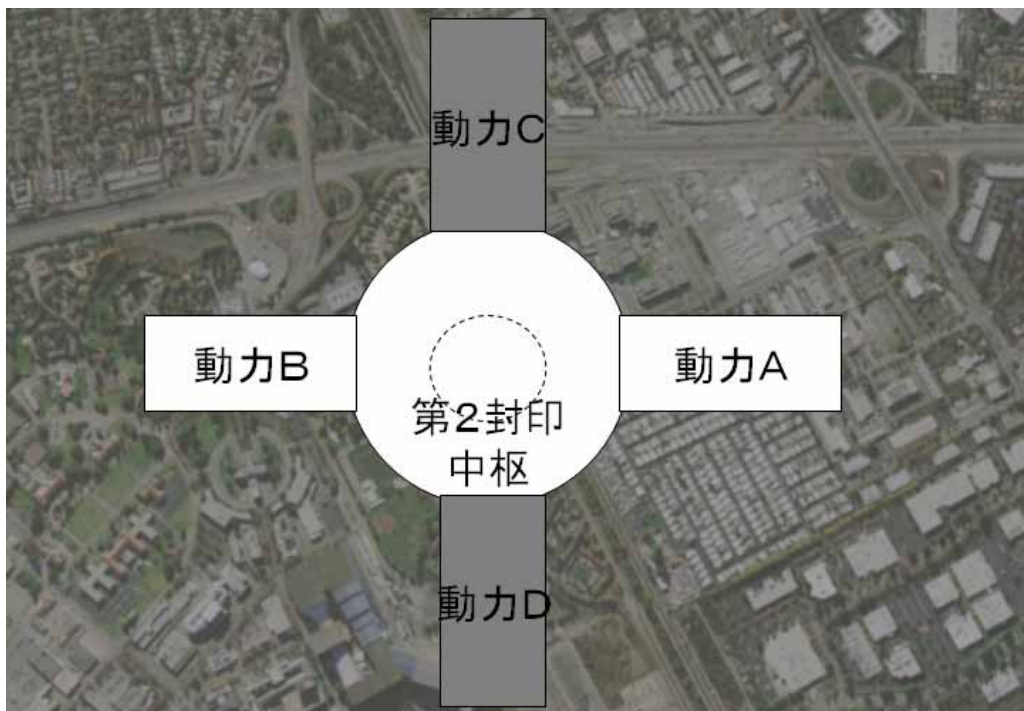
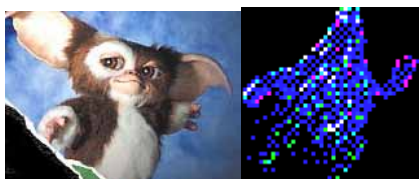


図 5 第2層



⁴⁸ ホーンテッドマンション(ディズニーランドのアトラクション)で最初の部屋での案内役のゴーストのセリフを引用。
ちなみに自画自賛だが、筆者はこの真似が非常にうまい。もうホーンテッドマンションなんてディズニーランド開園
の頃から何回行ったか毎朝食べるパンの枚数くらいに覚えていませんよ！



図 6 最下層

第6章 強引なる竜への転生

ついに最下層に辿り着いた一行。そこは滅んだ機械仕掛けの都市であった。

メルララ「すごいぞ！ラピュタは本当にあったんだ！」

マスター「**そうそう。そんな感じそんな感じ**」

ガットウーゾ「見たまえ、人がゴミのようだ。」

ウェイク「まだそこまで行ってねえ！（笑）」

マスター「**あと、見渡すとセーブポイントがある⁴⁹**」

ハイドン「嘘！？セーブする(笑)」

さて、セーブも完了し(笑)一行は隣の祭壇の部屋でプレートをコントロールパネルに装着し、空中城塞を起動したリベリウスに対面する。

ウェイク「そのプレートは！ロツソが持って行ったプレート！」

マスター「**でもって、リベリウスがいます**」

ハイドン「ムスカ！？」

マスター「**うむ(笑)**」

メルララ「狙ってます(笑)」

リベリウス「**来たか。だが、もう遅い。空中城塞は私を主として起動した。あとは全ての都市を滅ぼし、我々ヘルハザードの支配する世界になるのだ！**」

ハイドン「**そうはいくか！**」

リベリウス「**お前らは色々と役に立ってくれたな。あとは卑小な人間共を始末するのみだな**」

⁴⁹ まあ、ファミコンとかのRPGではよくあるなぁと思い、最終決戦に近い事を示すために発言してみたマスター。

キト「俺人間じゃないもーん(笑)」

ウェイク「俺人間だもん」

ガットゥーゾ「こいつだけだよ、卑小なのは(笑)」

リベリウス「うるさい！お前達はもう死ぬがいい」

マスター「と、言い、ドラゴントゥースウォリアー⁵⁰3体を召喚して、戦闘に突入」

メルララ「30秒あったから3ラウンド狙いがついたね(笑)」

ガットゥーゾ「待てリベリウス！俺もファミリアーを召喚する！」

マスター「人間共とか言う俺はエルフだもーんとかいう奴には問答無用だ！(笑)」

ウェイク「最後の最後でチームワークが良くないな(笑)」

さて、グダグダな感じで戦闘に突入する。

< 第1ラウンド >

お約束のようにキトとガットゥーゾは『ライトニングクロス』を炸裂させる。が、リベリウスは抵抗し、高いダメージは与えられなかった。しかし、キトはスケルトンウォリアーにはクリティカルヒットで高いダメージを与えた。ガットゥーゾはいずれにも抵抗され、まともなダメージは与えられない。

メルララ「じゃあ、狙って！！リベリウスに！」

一方メルララはせっかく3ラウンド狙撃用意したものの、ダメージのサイコロが1ゾロとなってしまう、狙撃用意の甲斐なく、攻撃をはずしてしまう。

スケルトンウォリアーとリベリウスの敏捷度が近く、続いて一斉に攻撃を行う。リベリウスはガットゥーゾとハイドンに対して『ライトニング』の反撃。スケルトンウォリアーはロツソ、ハイドン、ウェイクに対して1体ずつ攻撃をかける。ロツソとシリスはこのスケルトンウォリアー1体を引き受ける。ただし『ライトニング』はダメージのサイコロが低かったため、まともにダメージを与えられなかった。スケルトンウォリアーに関しても同様である。

ウェイクは『ヒートプロテクティブサークル』を唱える。名前の通り、炎に対するダメージを減少させる魔法である。しかし、魔法の効果範囲をまともに確認せず唱えたウェイクは思ったより効果範囲がなく、結局自分一人だけに対してとなる。

ハイドンは自分に向かってきたスケルトンウォリアーをカチ割り丸の一撃で粉碎する。

ハイドン「どら！！16点」

マスター「命中、ダメージ、死亡(笑)」

< 第2ラウンド >

キト「・・・ハイドン、お前を強化する！」

マスター「・・・カッコいいな」

⁵⁰ ドラゴントゥースウォリアーはソードワールドの世界ではこのように魔法使いに召喚される怪物。外見はスケルトンに似ており、武器を装備した骸骨であるが、強さは比べ物にならず、アンデッドというよりはゴーレムに分類される。ちなみに、もともとの由来はギリシャ神話での冒険譚より、石が投げられてお互いに喧嘩するという小学生以下の知性を持っていた。



ハイドン「いや、怖い(笑)」

キト「ここかなあ…(1ゾロ)ん～っ？間違えたかなあ…！(笑)」

かくしてキトの魔法は失敗する。メルララは『デストラクション』を唱えて、1ラウンドの間リベリウスの魔法を遮る。(遮ったつもりであるが…)

ガットウーゾは再び『ライトニング』を唱えるが、リベリウス・スケルトンウォリアー共にまともにダメージを与えられずに終わる。抵抗失敗したもののダメージを出せないケースがガットウーゾには多い。

敵のターンでリベリウスは防御行動(魔法を唱えられないので)をとる。残った1匹(1匹はロツとシリスが相手している)はウェイクに攻撃するが、外れてウェイクが『フォース』を唱えて反撃をする。なまじっか殴るより『フォース』の方が強力であるというジンクスに基づく行動であるがまだスケルトンウォリアーは生存中。続いてハイドン

ウェイク「お膳立ては揃ったぜハイドン！」

ハイドン「ハイドンクラッシュ！はあっ！うおおおおっ」

この一撃でリベリウスは撃沈する…

リベリウス「おのれえ！少し早いがこのつを使うぞ」

マスター「と言うとリベリウスは『リボーンドラゴン』⁵¹を唱えてドラゴンに変身した！」

メルララ「ちょっと待って、『デストラクション』は！？」

マスター「(あ…しくじった。『リボーンドラゴン』で言っちゃったしなあ)」

メルララ「デストラクションの最中に唱えようとしたらダメだよなあ…じゃあ、そういう夢を見たってのは？」

キト「夢オチか(笑)」

マスター「しかし、もう『リボーンドラゴン』って言っちゃったんだよなあ」

ウェイク「マスターとしては、ドラゴンと戦わせたいんだよな…？」

メルララ「でも、プレイヤーサイドとしてはそれは全力で阻止したいからね⁵²」

マスター「…じゃあ、城塞都市が光り出した。リベリウスが何か操作を行ったらしい、強い光が發されて」

ウェイク「目が！目があ～っ！」

ハイドン「そんな事言うなよ、絶対こいつらやるんだから、バカみたいじゃないか(笑)」

マスター「目が回復すると、目の前にドラゴンが立っている」

メルララ「ちょっと強引じゃない？2アクションでないの？」

ウェイク「ド、ドラゴンだあ！」

ハイドン「ど、どらごんだあ～」

ウェイク「やる気ねえ…(笑)」

⁵¹ リボーンの名前通り、ドラゴンに瞬時に転生する魔法。ドラゴンプリーストのみ唱える事の可能な究極の魔法であったが、デストラクションによって妨げられてしまう事は言うまでもなかった…

⁵² それもそうだなあ…マスタリング的にはちょっと後から後悔

第7章 やべ、強すぎた（マスターの声）

やや強引なマスタリングにもめげず一行はドラゴンと相対する。

<第1ラウンド>

キトは敏捷度を高める『クイックネス』をハイドンとウェイクに対して唱える。

一行はプレスを避けるために物陰に隠れるように移動する。この間にハイドンに『クイックネス』『ストレングス』（ハイドン「むきむきむき〜」）『ファナティシズム』⁵³が唱えられ、ハイドンは限界まで強化される。

ハイドン「急に早くなった。それでも一番遅いけど(笑)」

キト「ハイドン、裏に回れ。」

ハイドン「裏から攻撃ね。」

ハイドンのこの攻撃は1ゾロではずしてしまう。更に、ウェイクも回復をしようと思ったら1ゾロで一人失敗していた。

ドラゴンに変身したリベリウスは飛んで、空中に移動する。

ガットウーゾ「ここそんなに天井が高いんだ？」

マスター「うむ。高い。で、斧は届かなくなりました」

ハイドン「…どうすんだよ？」

ウェイク「ロツソ飛べるじゃん？⁵⁴」

リベリウス「こんな世界など滅びてしまえ！」

メルララ「お前が死ぬ」

<第2ラウンド>

ドラゴン(リベリウス)が飛んだおかげでハイドンができる事はなくなり、しばし途方にくれる一行。ハイドンはヘビークロスボウに持ち帰る持ち替える。これに対し命中精度を高めるためキトが初志貫徹とばかりに『シャープネス』で器用度を高める。

ハイドン「コキヤ、コキヤ、コキヤ〜！」

マスター「なんだその表現方法？(笑)」

メルララ「あ、それこっちにも頂戴。」

ハイドン「いいね、いいね。」

メルララ「で、さらに狙いをつけるよ」

⁵³ 精神の精霊に働きかけ、精神を高揚する魔法。これにより、攻撃が良く当たるようになるが、一方で攻撃に良く当たるようになる。ちなみに、筆者はデフォルトでこのファナティシズムにかかっている。というかただのバカ？

⁵⁴ えー、ロツソは2階ほど前のシナリオで魔法のアイテムを入手し、炎をまとったまま時速 300kmの超高速で飛行することができる。けどNPCだからしなーい。

Sword World - Siland Saga

ガットウーゾは魔晶石を使ってハイドン、ガットウーゾ、キトに対して『カウンターマジック』を唱え、魔法に対する防御力を高める。シリスは『トランスファーマENTALパワー』でガットウーゾの精神点を5点回復させる。ウェイクは一人『フォース』を放つが、ダメージを与えられなかった。

ドラゴン(リベリウス)は吼える。

マスター「ドラゴンの咆哮を聞く者は激しい恐怖をもたらします。各自精神抵抗17で」
ガットウーゾ「(ハイドン)お前はかかるの？」
ハイドン「俺耳聞こえないんだ(笑)」
ガットウーゾ「『ファナティシズム』かかてるでしょうが。」
マスター「あ、そうか。『ファナティシズム』の状態だったら大丈夫だな。でも、持ち替えてできるのかな？(笑)」

マスターの懸念をよそに何人かは抵抗にかりうじて成功するものの。キトは恐怖で逃げ去る(幸い都市なので、逃げ場所はある)。シリスとロツソは恐怖で動けなくなる。ガットウーゾも同様に恐怖に襲われるが、かりうじて動く事ができる。

キト「ダハダハダハダハ」
マスター「『サニティ』⁵⁵使ってあげたら？ウェイク？」
ウェイク「そうんだけど、こいつ逃げ出しちゃったもん。敏捷度24だから追いつかんわ(笑)。サニティって触らなきゃダメだからさ(笑)」

< 第3ラウンド >

まずはキト、この場にいらない(キト「アヒャー」)
メルララは物陰に隠れ、矢を放つ。クリティカル率50%であるが、1度しかクリティカルヒットせずドラゴンの鱗に阻まれて、まともなダメージは与えられなかった。更にガットウーゾは『エネルギーボルト』を唱えるが、抵抗に成功され、これもダメージは与えられない。
ウェイクはロツソとシリスに『サニティ』を唱え、二人を回復させる。
唯一のダメージ源となりうるハイドンは持ち替えたヘビークロスボウを発射する(ハイドン「撃ってみよう。どの程度の一撃なのか・・・」)。強力な一撃であり、ドラゴンにダメージを与える事ができた。

ガットウーゾ「コレが通らなかつたらヤバイだろ？」
リベリウス「小癩な！」
メルララ「今ので1ラウンド終わりだ(笑)」

小癩など、リベリウスは飛来し物陰からピシピシ矢を撃っていたメルララを攻撃する。これにより、メルララは即死となる・・・

ハイドン「マジで・・・？」
メルララ「うん。生命力ないしね、はい死んだ。当然だよな。ホントは『デストラクション』で防いでい

⁵⁵ 触れる事によって対象を落ち着かせる僧侶の魔法。

たんだけどね(笑)」
マスター「まだ言うか。」
ガットウーゾ「もう終わりだ……」
キト「もうダメだぁ……って言いながら走っている」

ところが……

マスター「メルララはドラゴンの牙に噛み砕かれて死んでしまったが、その瞬間、ハイドンの『カチ割り丸』とメルララの『止めの弓』が共振をして - 」
ウェイク「さらにモウ・ハンチャの鎧も？」
マスター「で、二人は……白昼夢を見ました」
ハイドン「アハハハハ……やべ、いっちゃったよ。俺。」
ガットウーゾ「いろんな魔法かけすぎたからな(笑)」
マスター「で、二人は巨漢の裸の男と、グラスランナーに似た種族と思われる人が、海を渡り、ドラゴンと戦っている夢を見ました」
ハイドン「裸の人が……(笑)」
マスター「でもって、メルララは復活しました。」

と、なぜかメルララは復活を果たす。カチ割り丸は熊の波動を放ち、遠距離攻撃が可能になり、メルララの弓もパワーアップをした。

ウェイク「俺のモウ・ハンチャの鎧は？」
ハイドン「シーンとしている(笑)」
マスター「いや、ない。関連性がないからね？」
ガットウーゾ「ドラゴンと交渉すればいい(笑)」
リベリウス「おのれ！ 果たしてもお前達が邪魔をするのか！」
ハイドン「いや、俺達がしているわけじゃないんだけどね(笑)」
キト「裸の巨漢の戦士が(笑)」

いい感じに盛り上がってきたところでハイドンは持ち替えてカチ割り丸を振るう。この一撃はクリティカルヒットをし、リベリウスに対し致命的なダメージを与える。(キト「キトの仇 ッ！ 俺の中ではもう死んでるから(笑)」)

以降しばらく戦いを繰り広げるが……ついに

マスター「ドラゴンもといリベリウスは」
リベリウス「中々やるな。今日はここまでにしておこう」
ウェイク「うおおおい！(笑)」
ハイドン「勝手な事を！」
リベリウス「だが私はいつかネイルの者共を滅ぼしてやる！」

一行、ここぞとばかりに去りかけるリベリウスを狙い、矢を放ったり、『ライトニング』を撃つたりするが、まともにダメージを与えられず。ドラゴン強し！

リベリウス「貴様らのおかげで私はドラゴンになる事ができた。私はまた帰ってきてこの世界を滅ぼしてくれよう！」

ハイドン「望むところだ！」

キト「望むの-----っ！？(笑)」

リベリウス「その時まで、貴様らの命、預けておいてやろう」

マスター「リベリウスはそのまま東の空へ去っていった。パッサパッサと」

キト「じゃあ、去り際にもう一発『ライトニング』を。何が何でもケツの穴に！(笑)」

こうして、リベリウスは去り、戦いは終わった。

第8章 いいからとっととついて来なさいよ！というオチ

リベリウス(ドラゴン)との戦いは終わったが、空中城塞の浮上は止まらず、一行はここから脱出しなければならない。

ハイドン「オレは未だにドラゴンが去った方に向かってソニックブーム撃ってるから(笑)」

マスター「さて、眼下の地面はどんどん小さくなっていっているんですが…」

ガットウーゾ「じゃあ、『フォーリングコントロール』を使って飛び降りるよ。全員分の精神点がないけど」

そこで、キトとガットウーゾに対して、所持している魔晶石を動員し、何とか地上に戻る事ができた。

ウェイク「よし、飛び降りるぞ！」

ハイドン「負けるか、俺も！」

キト「待て待て、お前はまだかけていないんだ！」

ハイドン「ひええええ-----っ！？(笑)」

かくして、一行は地上に到着した。タマサイ城は完全に崩壊していた。

サイドン「みなさん、無事であったか？」

ハイドン「あまり無事でないんだが…(笑)」

サイドン「リベリウスは？」

ハイドン「ドラゴンになってどこかに行ってしまったよ…」

サイドン「シリス様、国王が…ネイル国王が…」

シリス「お父様が！？お父様…」

ガットウーゾ「お父様なんて知ったこっちゃないわよ！(笑)」

どんなツンデレだよ。で、ネイル国王は一行が帰ってきた時にはその生涯を閉じていたのであった…更に…

マスター「などと話していると、伝令らしき騎士が現れて」

伝令らしき騎士「シリス様！北と東からマンガーと東ネイルの連合軍が攻めてきました！」

ウェイク「ガビーン！話、続くんじゃん！」

シリス「とりあえずこの場を離れます、いつの日か必ずネイル王国を復活させてみせる！」

ハイドン「頑張ってください(笑)」

シリス「まあ、どうしてもって言うのならあなた達に手伝わせてあげてもいいわよ」

ウェイク「頑張ってください。」

メルララ「どうしてもって言うんだったら手伝ってあげてもいいわよ(笑)」

シリス「…ええ、そうよ。いいからとっとと来なさいよ！！(笑)」

と、シリスと一行はタマサイ城を逃れ、西へ向かったのであった。

ここでサイランドサガ第1部は終了となる…

あとがき

あー、やっと終わった終わった。これで QDS を始めることができるわ(挨拶)

ということで、ひとまず『サイランドサガ』終了、ということで第4回のリプレイをお届けしました。気がついたらプレイから半年経ってます。

なんか最後は無理やり感の漂うサイランドサガ最終章です。イマイチ最終章っぽくならず、ジャンプの打ち切りっぽい終わり方になりました(ヒドい言い方)。途中まで、特に第3部あたりまでは良かったんだけど第4部、つまりこの最終部はちょっとイマイちなシメだったなあ。指輪物語も微妙だったし、キャンペーンの落着いて実は結構大変なんじゃないの？ACRAP ではあまり経験ないんだよねよく考えたら。ダンガーラ位しかねえっつうの！

とは言え、明確なコンセプトでフォーセリア以外を暴れ回るのが実現できたからよしとする。それしかないかな。

先ほどジャンプと言いましたが、ジャンプと違いサイランドサガの第2部は計画中です(ジャン！)。今度は正統派冒険ファンタジー、ファルコムの『英雄伝説』っぽいのをやってみたいと考えています。今までやっていなかったのかというツッコミは軽く却下します。とは言え、すぐというわけではなく QDS が一区切りついてからになりますな。まあ D&D でサイランドサガやっちゃいけないって事はないだろうから D&D でやる事も検討中です。魔法の系統とか変わってしまうのはウケるなあ……。

それにしてもダイジェストリプレイ形式、まあ着想は悪くなかったけど普通に書いていった方が楽なんじゃないの？って思いました。うーんとね、ストーリーがしっかりしていて、その流れに PC 全員が乗り切れているならアリだけど、今回は誰とは言わないがガットウーゾとかウェイクの中の人だとめどなく発言するから、それを捨てるのか地の文に書くのかで悩み、それが効率的にはデメリットになってしまっていました。**枠で囲うのが面倒だし**

まあ発想そのものはそれほど悪くないし、リプレイスタイルの一つとしてももう少し試行錯誤を続けてみようかと考えています。枠の使い方とか、発言の抽出メソッドとか反省し、改善する点はいくらでもあります。

と言う事でサイランドサガはここで終了。続編は1年後位？に再開し、私自身の時間の使い方としては他のプレイヤーがマスターとなって進行するキャンペーンである『ファーローズ』『カストゥール』あたりでプレイヤーとして居合い切りしたり、ゴーレムったりで、一方で D&D による新機軸のセッション『QueenDragonSchool』をまったり進めていきたいと思います。

では、次は『QueenDragonSchool』のリプレイ(タイトル、構成、その他いろいろ未定)でお会いしましょう。

2007/02/26(年越えちゃったよ)

Ken.Kaiho